

宮崎県の新福青果が第1号目指して受審

JGAPとグローバルGAP、同時審査スタート

3月13日、(有)新福青果(新福秀秋社長、宮崎県都城市)にてJGAPとグローバルGAPの同時審査が実施された。審査に合格すれば、2つの認証を同時に取得した国内最初の農場となる。本審査はJGAP指導員の現地研修も兼ねており、JGAP指導員など約20名が立ち会った。

JGAP協会が確立したJGAPが、世界で最も普及しているグローバルGAPとの同等性を認められたのが2007年8月。JGAP協会は06年11月からJGAPとグローバルGAPの内容をすり合わせ、同等以上とみなされるかどうかの検討作業を繰り返してきた。

世界約6万農場が認証取得済み

グローバルGAPはEUで普及が始まった世界最初のGAPで、EU域内を始め、南アフリカ、チリ、アルゼンチン、トルコなど世界中の約6万農場が認証を受けている。また、グローバルGAPとの同等性を確認されたGAPはJGAP以外に英国、オーストラリア、オランダのGAPなど世界に18カ国ある。

同等性が確認されたことでJGAPの審査を受けて合格すれば、JGAPとグローバルGAP認証の両方を同時に取得できるようになった。EU内の大手量販店などが取り扱う農産物にグローバルGAPの認証取得を義務づけていることから、EUに農産物を輸出する農場にとっては有利となる。

新福青果は直営農場(約90ha)でサトイモ、ニンジン、ゴボウ、フッキョウなどの青果物を生産する農業生産法人。宮崎・鹿児島両県にまたがる数百戸の契約農家からも農産物を集荷しており、一部は加工して量販店、生協、外食業者などに出荷している。

JGAPは自己防衛の手段

同社がJGAP認証を取得したのは06年8月。同社は農

場管理の一環として畑での作業内容や作業時間、農薬など資材の使用状況などを圃場一枚ごとにパソコン入力し、データベースに蓄積したり、生産履歴管理するということが10年以上前から行なっていた。「有機JAS認証、特別栽培などにも取り組んできたが、何か問題が起こった時の自己防衛になるものがほしかった」と吉岡真一主任はGAP認証取得の理由についてこう話す。

さらに07年12月にはJGAPとグローバルGAPの審査をそれぞれ受けて合格した。台湾などに青果物の輸出をしていることや同社の取引先のひとつであるイオンからの要望もあり審査を受けることになった。

GAPは圃場での農作業や、収穫してから保管・選

別・調製・洗浄・包装といった一連の工程において発生するリスクを特定し、そのリスクを減らすためのルールや手順を確立し、かつ実施している農場に対して認証が与えられるというもの。この日の審査は午前9時から午後3時まで行われ、午前中は書類審査、昼食をばさんで現地審査、

講評の順で進んだ。JGAPが作成した文書「管理点と適合基準」(青果物)の第2・1版に従って、「農産物の安全」、「環境への配慮」、「生産者の安全と福祉」、「農場経営と販売管理」の4項目で審査された。

新福青果にとって3回目のJGAP審査ということもあ



現地審査の様子。農業散布時の防護服が保管してある場所にて。内田審査員(左)と渡邊農場長(右)



肥料保管場所での現地審査の様子。



堆肥舎での現地審査。

り、ムーディー・インターナショナル・サーティファイケーション(株)の内田修一審査員から質問を受けると、渡辺克巳農場長、吉岡主任は保管している書類をもとに「新たに圃場を増やす場合、その土地が作物生産に適しているか検討したか」という項目があった。「その土地の使用履歴、土質や水質、ドリフトの危険性などを記載した『新規圃場カルテ』を作成・管理している」と回答していた。

今回の審査で、審査員が細かく質問していたのは農産物を収穫し、その後農産物を取り扱う(保管・選別・調製・洗浄・包装する)施設での安

全性に関するリスクについてだった。この項目は、グローバルGAPとの同等性を確立する以前からあった項目だが、「農場で定めた対策、ルール、手順を作業員全員に周知し、実行させているか」などの管理点が新たに加わった。新福青果では農産物を取り出し、圃場から農産物取扱い施設までの輸送について、どんなリスクがあるのかを検討し、リスクを減らすことを念頭に置いて業務フロー表を作成していた。審査員は「それをどうやって作業員に周知させていますか」と質問していた。ほかにも、今回から新たに加わった「農薬を扱った作業員は毎年、健康診断を受け

基準に満たない点は修正申告書を提出

ているか」といく管理点についても質問が及んだ。午後からは農薬や肥料など資材の保管庫、圃場、堆肥舎、集荷場、育苗ハウスなどの現地審査が行われた。現地審査は、農場がリスクを軽減するために定めた手順が実施されているかどうか、記録がされているかどうか、記録がされた一貫して農産物や環境にリスクを及ぼすことがないかどうかに主眼がおかれ、液体の入った容器を発見すると「これはなにか」、廃材置き場では「これらの廃材はどうやって処理しているのか」などきめ細かいチェックがなされた。

審査員からの講評で農薬、応急処置訓練、危険物や場所の表示などの点で基準を満たしていない点が指摘され、「修正して申告してください」というコメントがなされた。この修正申告書が妥当とみなされれば審査に合格する。

審査終了後、渡辺農場長に感想を聞くと「2007年12月にJGAP、グローバルGAPのそれぞれの審査と大差はなかった。審査が別々だったために準備のための時間やコストがかかったが、今回その点は解消された」と話してくれた。JGAP協会の武田泰明事務局長によると、「JGAPのみの審査の場合、審査費用は6万円だが、JGAP・グローバルGAPの同時審査の場合はEUにあるグローバルGAPの本部との間で書類のやりとりなどが発生するため、10万円ぐらいになるだろう」と話している。

筆者はISO14001の審査にはたびたび立ち会ったが、審査員は厳格な審査を行なう一方で、「この書類は非常に見やすい」と評価してくれたり、「ここはこう改善したほうがいい」というアドバイスをしてくれたりする。今回のGAP審査も同様だった。審査は合格が最大の目的だが、日頃行なってきたリスクマネジメントのどこが優れ、問題があるのかがわかり、



ラッキョウの圃場。農薬のドリフトに細心の注意を払っていると書かれた看板を立てている。

受審する側としては役に立つものとなっている。

JGAPの認証を受けた農場は198(08年1月末時点)に達したが、審査に不可欠な水質・土壌、残留農薬分析などの費用を含めると数十万円になる。グローバルGAPでは「GAPは商品の付加価値を高めるためのものではない」といわれており、日本の流通の現状を考えると商品価格に上乗せするというのは現実的にむずかしい。費用の負担を含め、各生産者がGAPを農場経営でどう位置づけるかという方向性の確立なしには、意味のあるGAPの普及は容易ではない。新福青果が真摯に審査を受ける姿を見て感じた。